女性三代記の構想
―桜木紫乃『ラブレス』論―
The design of women's annals over three generations
―A study of Sakuragi Shino "Loveless"―

*小田島　本有
Motoari ODAJIMA

一

二〇一一年（平成二十三年）八月の『ラブレス』刊行は、桜木紫乃にとっても大きなターニングポイントになったと言えよう。

この年の十一月六日、第三回市立釧路図書館朗読会「桜木紫乃の世界」が開催され、当日は桜木本人も来場してのトークショー、サイン会も行われるということもあり、会場は満員の盛況となった。ちょうど『ラブレス』が刊行されて間もないころであり、私の周囲でもこの作品を夢中になって読んでいる人が中高年女性を中心に少なくなかった。この反響の大きさは、それまで刊行されていた『氷平線』『風葬』『凍原』『恋肌』などとは明らかに異なっていた。そして、翌年一月にこの作品が直木賞候補作としてノミネートされるに至って、地元釧路での期待はいやがうえにも高まった。そして、桜木紫乃の名前はこの時を境として、地方区から全国区へと転じていったのである。この時は直木賞受賞を果たすことができなかったものの、翌年『ホテルローヤル』で受賞を決めたことを思えば、このころが桜木にとってちょうど上り調子であったと言える。

ところで、この『ラブレス』、耽読する人が多い一方で、やや読むのに苦労するという難点を否定しがたい。一つは章段にタイトルがないなかで過去と現在が交錯して登場してくること、人間関係が入り組んでいて一読しただけではそれらが容易に把握しにくいことにその原因がある。それでもなおかつ多くの読者の支持を得たのは、ひとえに作者の力技のゆえである。

二

この作品の中心となるのは言うまでもなく、杉山百合江である。

彼女の人生は実に波乱に富んでいる。次から次へと災難がふりかかり、彼女の生涯は不幸の連続だったということになりかねない。しかし、この作品は冒頭からそのことに疑問を呈するような書き方がされている。

百合江は市民病院に運ばれ、内臓がほとんど働いていないという診断が下される。医者の話によると、まだ七十代半ばの彼女はもう老衰の状態にあるとのことだった。

妹の里実とたった四つしかはなれていないことが冗談に思えるほど、横たわった百合江は老いて見えた。小夜子は数分のあいだ、欲をそぎ落とした百合江の姿を見ていた。幸福そうな寝顔に思えるのだが、里実にはそう見えないらしかった。

里実と小夜子は親子である。つまり、横たわる百合江を妹の里実と姪の小夜子が眺めていることになるのだが、二人の百合江に対する印象が大きく異なっていることが分かる。小夜子には「幸福そうな寝顔」に思えても、里実にはそう見えていない。実は小夜子の抱いた印象は彼女ひとりだけのものではなかった。このあと病院を訪れた理恵（百合江の娘）も、「ねぇ小夜子、うちのお母さんって、こうやってみると、あんまり不幸そうな感じしないね」と述べているのである。

*釧路高専一般教育科（国語）小田島本有

他人の寝顔を見て、それが幸福そうに見えるか見えないかは人それぞれだ、というのは至極もっともな話である。ただ、この場合注意したいのは、眺める側にある種の条件が影響を及ぼしていることが多いということだ。

理恵と小夜子、この若い世代は百合江の生涯に関する知識を殆ど持ち合わせていない。娘の理恵ですら、母親から自分の歩んだ人生を詳しく聞かされた記憶がなかった。したがって、彼女たちは百合江の今の寝顔をそのものとして眺めている。それが「幸福そう」という印象なのである。

ところが、百合江の妹である里実の場合は違った。彼女は折につけ姉の生きざまを目の当たりにしてきた。里実の目にした姉の一生は苦難の連続として映った。そのような事情があれば、里実に百合江の寝顔が「幸福そう」に思えなかったのも致し方のないことだったのである。

究極のところ、この作品では「幸福」とは何か、ということが問われている。里実の価値観からすれば百合江は計画性がなく、ただ流されるばかりで苦労を背負い続けているだけの人生を送った女性であった。その里実からすれば百合江の人生が幸福に思えるはずがない。しかし、当の百合江自身はどうだったのだろうか。もはや死を迎えるしかない彼女に直接尋ねることはかなわない。しかし、この物語を通読したとき、われわれはこの問いをどう捉えるべきなのか、答えを促されることになるのである。

三

まず、この作品のヒロインとも言うべき杉山百合江に目を向けてみたい。

妹の清水里実と比較した場合、百合江の性格、生き方は実に対照的である。彼女は誰かを恨み続けるということがなかった。確かに、わが子である綾子を自分の知らないうちに手放して、平然とかまえる姑カネに激怒し、彼女にものすごい形相で食ってかかる場面はあったものの、ある時点を境に行方の知れぬ娘を捜し求めることを百合江は断念した。その辺の事情については後ほど考察したい。

しかも、妹の里実が用意周到で、計画的に物事を進めていくタイプだったのに対し、姉の百合江はまさに風に流されるような人生を送った。これが里実にとって腹立たしいものであったのは言うまでもない。しかし、この無計画性ということが、百合江の強くてしなやかな生き方を可能にしたとも言えるのである。

その百合江を愛した男性が少なくとも二人いた。一人は百合江が旅芸人の一座にいた頃の仲間だった滝本宗太郎、もう一人は百合江が夫の借金返済のため弟子屈の旅館で仲居として働いていた頃から添乗員として関わりのあった石黒である。

座長であった一条鶴子は、自分が病で倒れたことをきっかけに一座を解散した。その結果、百合江は女形役者でギター伴奏者でもあった宗太郎と二人で行動を共にする。その二人が結ばれたのは自然な流れであったと言えよう。やがて百合江は妊娠し、綾子を出産する。だが、宗太郎は決して父親の器ではなかった。子供が生まれたとき、宗太郎は「あたしの、死んだおっか様の名前」ということで綾子と名付けることを提案する。しかし、その時彼が見せた紙は『滝本綾子』ではなく、『杉山綾子』だった。ここに宗太郎の父親としての自覚の欠如を見ることは容易である。

宗太郎は百合江を「ユッコちゃん」と呼び、彼女に親愛の情を見せていた。二人で放浪しながら酒場で稼ぐ生活も、二人の肌には合っていたのである。しかし、宗太郎は生来の根無し草であった。定職を持って定住することが体質的に合わない人間だったのである。その彼に夫としての自覚、父親としての責任を求めるということ自体が、そもそも無理というものだった。後日、『杉山綾子　子』と書かれた戸籍謄本の写しを発見した里実が、「なに、これ。なんなのこれ。あの人、なに考えてんの」と怒ったのは、常識ある人間の価値観からすればもっともな反応である。綾子が百合江の私生児として届けられているという事実は、里実にとって許しがたいことだった。ましてや、宗太郎は失踪してしまったのであるから、里実からすれば宗太郎は最低の男としての烙印を押されたに等しかった。

しかし、当の百合江は宗太郎を全く恨んでいない。そもそも彼を家庭の枠に押し込めること自体、彼を潰すことになってしまうという認識が百合江にはあった。宗太郎が姿を消した後には、このような記述がある。

ふと、鶴子の遺骨をもって帰ろう、ひとりぼっちにしちゃいけないと泣いた宗太郎の顔を思いだした。百合江はどうか赤ん坊が宗太郎に似てくれますようにと祈った。男だと少し頼りないことになるかもしれないが、女なら愛嬌のある可愛い子に育つだろう。百合江は父親に捨てられたことも知らずに眠る綾子

の顔をのぞき込んで言った。

「あんた、女に生まれてよかったねぇ」

ここには、宗太郎が自分たちの元を離れたことに対する安堵の思いすら伺える。宗太郎はいない。しかし、綾子を授かったことで彼女の心は十分慰められていたのだ。

この宗太郎は最後、百合江のもとに帰ってくる。そして臨終を迎えようとする彼女を彼はじっと見守るのだ。自分が宗太郎に見守られていることを、おそらく百合江は知らない。しかし、病床でのこの光景は百合江にとって確かに幸福なことだった。

石黒もまた百合江を愛し続けた男である。苦労を重ねる百合江を何とか助けて支えになりたい、という一途さという点では宗太郎以上のものがあった。その一番端的な例が、行方の知れなくなった綾子を捜し求め続けたことである。後年、彼がしばらくぶりで百合江に電話を入れた用件は、綾子のその後をようやく突き止めたことを報告するということであった。

この二人は、たった一度だけ体を重ねたことがある。しかし、これがこの時限りのものであることをお互いが感じていたし、その後の二人の関わりは節度が保たれていた。ずっと独身を通す石黒に周囲がやきもきするほどであったが、二人は相手に対する思いを抱きながらもそれ以上の深入りをしようとはしなかった。石黒の東京転勤が決まり、送別会で職場の仲間たちが石黒を連れて百合江が歌っているキャバレー『銀の目』を訪れ、百合江をわざわざ自分たちのボックスに呼ぶよう画策したのも、この二人を何とかさせたいとの思いがあったからである。転勤の話を聞き、百合江が「お世話になった方が遠いところへ行ってしまわれる」と前置きして、思い出の『テネシー・ワルツ』を歌うシーンは実に印象的だ。

確かに苦労の連続であったかもしれない。しかし、百合江は宗太郎と石黒、二人の男から愛された。そして、歌に情熱を燃やせた人生があった。宗太郎と放浪していた頃、生活は決して楽ではなかったはずである。しかし、ザ・ピーナッツの『情熱の花』を歌って拍手喝采を浴びるなど、充実した時間を送っていたのだ。

四

百合江がいわば風まかせの人生であったとすれば、妹の里実は計画ありきの人生であったと言える。そして彼女の生き方を支えていたのは、いつか周囲を見返してやろうという、復讐の念にも似たエネルギーだった。

彼女は実家である標茶町中茶安別の開拓農家を離れ、幼い頃は夕張の叔母のもとで育てられた。この叔母は元芸者であったが、やがて旅館の女将となる。里実はここで大切に育てられ、叔母を「ママちゃん」と呼んで慕っていた。

その里実が十歳のとき、実家に戻される。彼女が目の当たりにした実家の様子はまさにカルチャーショックを彼女にもたらした、と言ってよい。彼女には家族の臭さが耐えられなかったし、母親のハギが文盲であることも信じられないことだった。生活が一変し、周囲に対する嫌悪感を隠そうともせず、そのため学校ではいじめの対象になっていたことも暗示されている。

里実はまずこの田舎から脱出することを願い、その後は周囲から蔑まれることのない人生を歩もうとする。彼女の計画性、そつのなさ、冷酷なまでの割り切りはこのような背景に支えられており、姉の百合江とは極めて対照的だ。彼女が理容学校に学び、そこで教えていた清水の誘いで釧路の清水理髪店に勤めるようになったのも、やがては経営者になることを夢見ていた彼女の計画通りであった。

この里実、絶えず誰かと闘っているイメージがある。しかし、その表面的な強さとは裏腹に、彼女には内部に抱えた弱さもあったことを見逃すべきではない。

里実の百合江批判がともすれば厳しくなりかねないのは、裏を返せば彼女の姉に対する愛着の強さとも言える。愛憎の振幅が大きいのはそのためだ。

里実は理容学校に通っていた頃、講師を勤めていた清水理髪店の親方に見込まれ、この理髪店で働くようになる。そして、親方から「うちの嫁に」と頭を下げられ、息子の時夫と結婚した。後に時夫は愛人を作り、子供までできてしまう。このとき生まれたのが小夜子である。時夫の行動は非難されてしかるべきだが、いつも計画的に物事を推し進め、夫を頼りにしないという里実のやり方が時夫の心に疎外感を生じさせ、彼の浮気を誘発するという一面はあったのではないか。

その一方で、里実は流産をしていた。そのことだけでも失意のほどは伺えるが、夫婦の間に子供がいなかったことで、夫の両親も生まれた小夜子を里実に育ててくれるよう迫ったのである。この屈辱的な仕打ちを受け、里実の心が落ち込んでしまったのは無理もない。この結果、彼女は百合江からの電話にも居留守を使うようになった。このようにコミュニケーション拒否を受けた百合江は、夫となっ

た高樹春一との間で子供を産む際、綾子を妹に預かってもらうことができず、姑カネに預けざるを得なかったのである。これが綾子失踪のきっかけとなったのは言うまでもない。

里実は夫の浮気、さらには自分の子でもない幼児を押しつけられるという屈辱と引き換えに、清水家での実権を握ることとなった。彼女のすることを夫ばかりか、その両親も黙認せざるを得ない状況を作り上げたのである。勝負にこだわる里実の立場からすれば、里実は確かに勝ったのかもしれない。しかし、その彼女が本当に幸福だったのか、というと問題はまた別である。

彼女は標茶の実家を嫌悪していた。それが彼女の結婚式では象徴的に示されることになった。彼女は実家の杉山家ではなく、嫁ぎ先の清水家の控室を利用したのである。しかも、この式が終わったら、実家とはもう付き合わないと宣言したのだった。里実は明らかに実家の家族を蔑視していた。その視線は当然実家の人間にも伝わる。百合江、里実の下には弟が三人いたが、作品を読む限り彼らの心は荒んでいる。それは蔑視を受けることでさらに強まったと言えよう。弟たちからすれば、姉二人は故郷を捨てた裏切者だった。弟たちがしばしば百合江を「女郎」呼ばわりするのも、その辺のことが大いに影響していると考えられる。

里実は両親や弟たちを蔑視するぶんだけ、より百合江に愛着する思いが強かったと言えよう。里実には、姉にはこうあって欲しい、という理想の姿があり、ともすればそちらへ導こうとする。それはまさに里実のペースであり、その際彼女は自分の善意を露ほども疑っていない。

百合江が宗太郎を連れて釧路に戻り、里実と再会したとき、里実は宗太郎に不安を覚え、「一座の人も一緒に標茶へ行くの？」と百合江に尋ねている。そして二人が標茶の実家から戻ってくると、里実から依頼を受けた男が宗太郎の仕事を探す手伝いに現れる始末であった。後に宗太郎は、「世話焼きの妹にもうんざり。親切ってのはもっと控え目にやるもんじゃないのかい。世話になってこんな言いぐさもなんだけどさ。あたしはもう、息が詰まりそうなんだよ」と、百合江の前で口吻をもらしている。施される側に息苦しさを与える。これが里実の「親切」であった。そこでは施される側の意向など全く顧慮されていない。宗太郎にとっては自分の人格を無視されたような思いがあっただろう。

改めて親切とは何だろうという思いがよぎる。里実には悪意がない。それだけに厄介なのである。

将来を見据え、計画的に物事を進めていこうという里実のやり方は、彼女の上昇志向的な生き方と表裏一体の関係にある。その里実は果たして幸福だったのだろうか。『ラブレス』にはそういう問いかけがある。

百合江は女として華やかな時間がほとんどなかったように思える里実を、心の中で哀れんでいた。人の心に寄り添ったり寄り添われたりというひとときがあれば、もっと柔らかな女でいられたのではないか。それでも、ふらふらと風に吹かれ続けた自分のことを振り返れば、すぐにそんな思いも吹き飛び、里実の生き方もまたひとつの賢い選択と思えるのだった。

決して断定はしない。それが桜木文学なのである。

五

宗太郎に逃げられ、娘綾子との二人だけの生活になった百合江に結婚相手を見つけてあげようというのも、姉の将来を憂いた里実らしい親切心の表れだった。その相手として彼女が見つけたのが、嫁ぎ先清水家の親戚筋にあたる高樹春一である。里実の結婚式に高樹も出席しており、彼はそこで百合江を見初めたのだった。高樹は弟子屈の役場職員である。彼とならば安定した生活もできるだろうという思いもあったに違いない。彼女は高樹に対して恋愛指南までしている。そして、高樹の粘り強いアピールが功を奏し、「潮どき」と判断した百合江は高樹のプロポーズを受け入れた。婚約決定後、高樹と百合江は里実のもとへ挨拶に訪れる。「里実の喜ぶ姿を見ていると、百合江も幸福だった。これでこの妹の気持ちを少しでも煩わせずに済むと思うと、心の底にあったものも軽くなった」とあるが、この結婚は百合江自身のための結婚というよりも、里実のための結婚という意味合いが強かったのである。

この高樹、人間の愚かさ、弱さをもっとも露呈した男として作品の中では描かれている。彼は一人息子であり、母カネに溺愛されて育った。そのため、なかなか自立できない男であり、その一方で見栄だけは張る男である。彼は自分を根本のところで支える自信がなかった。つまり内部は空虚であり、それを隠すように

して彼は外見にこだわったのである。

彼は百合江と結婚すると母親の住む家の向かい側に家を建てた。車も乗り回すし、家には電化製品が溢れている。一九六〇年頃という時代設定を考えてみた場合、これが地方公務員としてのレベルを越えていることは明らかだった。後で家を訪れた借金取り（北島）が、「車なんか乗り回してる場合じゃないでしょう。そのミシン、結納代わりだって？　いいご身分だねぇ。それ、フル回転させたってちょっとやそっとじゃ払いきれないよ。どうすんの。聞けば婆さんがひとりで一軒家に住んでるっていうじゃないの。どこの世界にそんなことできる役場職員がいるんだい。そろそろ腹括らないと、やっともらった嫁さんにも愛想つかされちゃうんじゃないの」と言っているのは、まさにその通りと言うしかない。つまり、彼は百合江にアピールするには贅沢な姿を見せる以外の手段を持たなかったのである。

百合江が近くの温泉旅館で働くようになったのは、そのツケが回って来たためだ。この事実を姑が快く思うはずがない。真相を知らない姑は、息子の収入があれば、わざわざ嫁が働きに出る必要はないと思い込んでいたからである。

作品によると、高樹の給料はまず母親に渡されている。その半額を母親が受け取り、残りが高樹に戻される。その中から高樹が必要な分を抜き取り、残りが百合江の手に渡るという仕組みになっていた。つまり、息子がいくらの給料をもらっているか、母のカネは承知していたのである。自分が半額を受け取っていたわけだから、残りの金額から考えても、借金取りが語るように息子の金の使い方を彼女が不思議に思ってもおかしくない。ましてや嫁の百合江が働きに出た時点で疑問を抱いても良かったのである。

しかし、この母親は息子に対して盲目であった。確かに高樹が母親の前で「いい息子」を演じていたという側面はある。だが、それを見抜けなかったのは母親の溺愛に要因を認めるべきだろう。

借金取りの北島は、高樹のみならず母親カネのいる場にも姿を現した。そこで高樹の借金が膨れ上がっていることを知らされたとき、カネはそれが百合江のつくった借金だと勘違いした。息子への溺愛極まれりである。

そこへ、大金持ちの夫婦が綾子を欲しがっている、という北島の甘言に乗せられ、カネは〈悪魔〉となる。第二子出産のため、やむを得ず一晩だけカネに綾子を預けたことが仇となったのである。〈悪魔〉となったのはカネばかりではない。戸籍係という職権を悪用し、戸籍の偽造を行った高樹も同罪であった。「春一、この男の言うとおりにしなさい」と言ったのはカネである。しかし、そもそもの諸悪の根源は高樹春一であった。

六

『ラブレス』はどうしても杉山百合江の波乱の人生に目が向けられがちだが、桜木はもう一つの仕掛けを施していた。それは、この作品を女性三代記として描くという構想である。百合江、里実姉妹はその中の二代目に位置する。

この作品はもともと、百合江の娘である理恵が従姉妹の小夜子に母親の様子を確かめて欲しいと依頼した場面から始まっていた。しばらく音信不通だった理恵が百合江に連絡をとろうとしたが、繋がらない。思い余って同年齢の従姉妹に連絡をとったというわけである。

理恵は小説を書いている。文学賞を受賞したとき、彼女は顔写真と出身地の公表は拒否した。ベストセラー作家というわけではないが、そこそこやっていけている。

一方の小夜子は里実の娘（といっても、実の娘ではない。清水が愛人に作らせた子供である）。その彼女は四十五歳にして妊娠を告げられていた。相手は職場の上司鶴田。彼とは十年の付き合いが続いている。小夜子の妊娠はこれが二度目だった。鶴田は小夜子とのことが原因で既に離婚している。しかし、小夜子の心は弾まない。妊娠の事実を彼に告げられない状況が続いていた。

『ラブレス』では、妊娠についていくつかのパターンが描かれていた。

宗太郎との子供を宿し、彼とともに標茶の開拓農家を訪れた百合江は、そこで久しぶりに母のハギと再会する。そのときハギは、「女ワラシふたり産んだって、男ワラシなんぼ産んだって、いいことなんかなんもなかった。いてぇ思いしただけだ。ばかばかしい」と言って、百合江に堕胎を勧めた。娘二人は田舎を飛び出し、息子たち三人も精神的に荒んでいる。そのような状況が彼女のこの発言を生んだのであろう。

最初の妊娠をしたとき、小夜子は伯母の百合江にその事実を打ち明けている。そのとき、「百合江おばさんは、ひとりで理恵を育てて、幸せだった？」と質問した小夜子に、「幸せに決まってるでしょう」と、百合江は即座に答えている。

そこには何の迷いもない。そして百合江はこう語るのである。

「わたしはね、小夜子ちゃんの人生は小夜子ちゃんのものだと思うの。子供は産みたいときに産んだらいいのよ。女は選べるんだもの。産んでやり直す人生と、産まずにやり直す人生と。どっちも自分で選べば、誰も恨むことないじゃないの」

「小夜子ちゃんも、自分の幸せのためなら、手前勝手に生きていいんだよ」

ここには百合江の生き方が凝縮されている。決して後悔しない。それが百合江の生き方だった。そして、このとき小夜子は堕胎を決意したのである。

しかし、あれから十年経った。四十五歳となった今、出産のチャンスはおそらくこれが最後である。かといって鶴田と結婚しようという気持ちにはなれない。そのような狭間に彼女は置かれていたのである。

ところで、『ラブレス』を読んでいると、百合江に関して一つの疑問が浮かんでくる。彼女は自分が理恵を産んで育てたことについて、幸せだったと断言した。それでは最初の子供である綾子についてはどうだったのだろうか。

綾子の行方が知れなくなったとき、百合江は必死になって彼女を捜した。しかし、ある時期を境にして、百合江はもう捜すことを断念し、『杉山綾子』の位牌をつくるのである。

その彼女の心の内を推測することは可能だ。仮に綾子を見つけ出して一緒に暮らせたとしても、生活の苦しさは目に見えている。それは決して綾子にとっていい環境とは言えない。それであるならば、恵まれた環境の中で育てられた方が綾子にとっては望ましいのではないか。おそらくそのような判断があったのだろう。事実、綾子は有名な音楽家秋山夫妻のもとで育てられ、音楽の才能を開花させるのである。

クラシックから演歌歌手に転じた「椿あや子」がわが子であることを、百合江はある時点で確信した。幼い頃から歌が上手く、喝采を浴びていた綾子である。椿あや子はテレビのインタビューで、「わたし、記憶の中ではいつも四、五歳なんです。川の音のする町で、いつも古い昭和の歌を歌いながら遊んでいるんですね。ザ・ピーナッツの『情熱の花』を歌って、ものすごく大きな拍手をもらったとか、とにかく歌っている記憶ばかりで」と語っている。これは里実の結婚式で幼い綾子が「歌う」と言い出し、母親とデュエットで『情熱の花』を歌って割れんばかりの拍手を受けた事実と明らかに符合する。しかし、椿あや子にとって、その記憶は極めて断片的なものだった。

百合江が『杉山綾子』の位牌をつくったのはこの時なのだろう。病床で百合江がしっかりと握っていたのがこの位牌だった。この位牌を眺めた理恵は、「杉山綾子かぁ。没年月日がわたしの誕生日って、なんか複雑」と述べている。理恵を出産したその日、綾子は百合江の前から姿を消したのである。

ちなみにこの作品のタイトル、もともとは「轍（わだち）」であったことを桜木本人、新潮社の担当編集者から私は直接伺ったことがある。しかし、「轍」ではインパクトに乏しいとの判断から、編集者の好きなロックのナンバーから「ラブレス」が採用されることになったという。ただ、「ラブレス」というタイトルが付けられた詳しい理由は本人たちからも聴くことができなかった。『ジーニアス英和辞典　第3版』（大修館書店、二〇〇一年十一月）によると、「loveless」の意味としては、「1　愛情を表さない〔受け入れない〕、冷淡な」「2　愛されない、可愛げのない」「3　愛情がない」という記載がある。

百合江が『杉山綾子』の位牌をつくったというのは、周囲から見ると「ラブレス」な行為に映るかもしれない。しかし、この行為の内に我々は百合江の強い思いを読み取ることができる。それは、わが子である「杉山綾子」への未練を断ち切ると同時に、演歌歌手「椿あや子」の幸せを願うことだった。それは百合江が綾子を愛するがゆえになし得た行為だったのである。

七

このまま標茶の実家に置いておいたら、心の荒んだ家族に殺されるかもしれないと危惧した百合江は、母ハギを里実の反対を押し切って釧路に連れ帰った。理恵がそのハギに大福餅を手渡す場面がある。

百合江も迷い、ふと背後を見た。

ハギが大粒の涙を流しながら大福を食べていた。娘と孫が自分を見ているこ

とには気づいていない。少ない歯で懸命に大福餅を噛んでいる。その姿は八歳の孫が黙り込むほど切ない光景だった。すべて飲み込んだあと、ハギがようやく聞き取れるくらいの声でつぶやいた。

「んまがった、ありがとぉ」

理恵が声をあげて泣き出した。百合江は涙を出せるなら自分も思いきり泣きたいと思いながら、そっと理恵の肩を抱いた。

理恵は初めて祖母と会った。そして、この時から二人の触れ合いが始まったと言ってよい。

百合江は女手一つで家を支えなくてはならなかった。毎日仕事に明け暮れる百合江には、ゆっくりハギと向き合う時間などなかった。その代わりを務めたのが理恵である。理恵は文盲の祖母のために文字を教えたりするようになった。そして、ハギは孫の前で娘には見せない姿を見せるようになったのである。ハギは若い頃、秋田で妻帯者であった卯一と出会い、駆け落ちして北海道へ渡ってきた。夕張を経由して二人は標茶で開拓農家を始めるのだが、その頃彼らにはそれなりの夢や希望があったはずである。ハギはその頃の楽しかった思い出を孫の理恵に語った。理恵はハギのよき聴き手となったのである。理恵の語るハギの記憶力、それによく笑うハギの姿は百合江の与り知らぬことだった。

そのハギは酒が好きだった。セーブするよう言われていたにもかかわらず、ハギの酒量は増える。駄目だとは知りつつも、楽しく語るハギを目の前にして、理恵はそれをどうすることもできなかったのである。

ハギはとうとう泥酔して警察に保護されたことがきっかけとなり、姿を消した。テーブルに置かれた書き置きには、「りえちゅんえ　じ　おしえてくれてありがと　ばば」とあった。これは理恵から教えてもらった文字を使った、ハギなりに精一杯の表現だったのである。

ハギが亡くなって骨を釧路へ運ぶ際、中茶安別の開拓小屋へ寄って欲しい、と提案したのは理恵だった。もう既に三人の息子たちの行方は知れなかった。

「おばあちゃん、本当は自分の家に戻りたかったの。おじいちゃんと一緒に作った家なんだって。いつか理恵も連れてってあげるって言ってた。寄ってあげて」

理恵がハギの最大の理解者となっている。百合江がハギを引き取ったことの一番の功績は、ハギと理恵を引き合わせたことかもしれない。後に理恵が小説家となるきっかけもここにあったのだ。よき聴き手であった理恵は、ハギ亡き今、今度は語り手に転じようとしている。

理恵のペンネームは「羽木よう子」だった。「羽木」が祖母の「ハギ」から来るのは容易に理解しやすい。それでは「よう子」とは何だったのか。理恵は小夜子にこう語っている。

「秋田の亀田からふたりで逃げてくるときに、無理がたたって死産したのが女の赤ん坊だったんだって。泣きながら土に埋めたけど、人間のかたちをしてるのに名前のないのはあんまりだって、おじいちゃんがよう子ってつけたらしいよ」

「よう子」とは、ハギが死産した娘の名だった。「羽木よう子」というペンネームには、亡き祖母のすべてを受け止めようとする理恵の思いが込められていたのである。ハギと百合江の関係はどちらかというと希薄なものだった。それを埋め合わせるかのごとく、理恵は自らを位置づけるのだ。

小説家となった理恵は、編集者から姉妹の話を書いて欲しいとの依頼を受けた。このとき彼女の脳裏をよぎったのは自分たちの親、すなわち百合江、里実姉妹である。百合江は自らの過去について多くを語ってこなかった。しかも、しばらく親子の間での音信は途絶えがちであった。その彼女が久しぶりに母親と連絡を取ろうとしたのは、明らかにこの小説執筆が動機として働いていた。しかし、なかなか連絡が取れないため、彼女は小夜子に母親の様子を探ってもらおうとしたのである。

そして、百合江、里実姉妹をモデルとした小説を構想しようとするならば、当然のことながら彼女たちを産んだハギにも思いが及ぶ。ハギにせよ、百合江にせよ、彼女たちは通常であればその死とともに忘れ去られてしまう無名の存在である。しかし、理恵は彼女たちの足跡を残そうとする。百合江の寝顔に見られた幸福そうな表情の理由は何なのか。その謎を明かすべく、理恵は動き始めるのであ

る。このようにして、「ハギ――百合江・里実――理恵・小夜子」という、女性三代記の構想が浮かび上がる。

桜木が小説家に関心を持つようになったきっかけは、釧路出身の大先輩である原田康子の『挽歌』を読んだことであることを、本人はしばしば語っている。自分の住む釧路がこれほど素晴らしく描かれていることに、桜木は衝撃を受けた。桜木にとって原田康子は小説家を目指すきっかけを与えてくれた、憧れの存在だったのである。

その原田康子の最後の長編が『海霧』だ。『海霧』は佐賀県から釧路へ渡ってきた先祖の歩みを、とくに女性たち三代の生き方に焦点をあてた力作であった。『ラブレス』を執筆する桜木には『海霧』のことが意識されていたのではないか。

八

そして、宗太郎は百合江のもとへ帰ってきた。

薔薇を百合江の腰のあたりに置いて、彼はそろそろと百合江の枕元へと身を乗り出した。

「ユッコちゃん、あたしよ。聞こえる?」

里実がよろけて壁に手を突いた。小夜子は慌てて母の背を支えた。

ユッコちゃん――。

彼が位牌を持つ百合江の手を取った。

男の目から大粒の涙がこぼれ落ちる。

ユッコちゃん――。

誰もベッドのそばに近寄ることができなかった。横たわる百合江と、その手を握って泣く老人と、生きている娘の位牌。毛布の上に置かれた赤い薔薇は、完成された一枚の絵のようだ。誰も身動きひとつせずふたりの様子を見ていた。

宗太郎の第一声を聞いて里実が思わずよろけてしまう場面は思わず吹き出してしまいそうだが、桜木にはこのような茶目っ気もあるのだ。

それはともかく、この光景を感動をもって見詰めている人物がいた。それは小夜子だった。

言葉にならない思いが、つよい哀れみと羨望をつれて胸奥になだれ込んでくる。

小夜子は自分の内側に宿る命に問うた。

わたしたちは今、願っても探しても、これから先どう生きてゆこうと、決して手に入らないものを見ているのではないか。

問いはやがて祈りにかわった。

それでも生きていく。理恵も自分も。からりと明るく次の場所で。

小夜子は百合江と宗太郎を「哀れみ」と「羨望」のこもった眼差しで見詰めている。

彼女はここしばらく、四十五歳になっての妊娠という事態をどうすべきか思いあぐねていた。しかし、ここでの彼女には結論が見えているようである。かつては堕胎をした彼女だが、今度は産む決意をするだろう。しかも鶴田には頼らない形で。理恵も面倒を見てくれると言ってくれた。

『ラブレス』は見方を変えれば、小夜子が母親として生きていく覚悟をするに至るまでの物語である。『ラブレス』を我々が読み終わったとき、そこから女性のさらなる物語が始まるのだ。